

● 第8回 静岡国際 オペラコンクール

小倉 多美子

今を時めく俊英たちが一堂に会するコンクールとして定着してきた「静岡国際オペラコンクール」。2017年で第8回を迎え、例年通り、世界の檜舞台を彷彿とさせる力演揃いのファイナルとなった。世界22の国と地域から191名が応募し、予備審査を経て9か国65名が出場、本選には3か国6名が進んだ。今回は男声ばかりの本選となった。

1996年、静岡県ゆかりのオペラ歌手・三浦環の没後50年を記念して第1回が開催され、応募年齢33歳まで、3年に1度行われる。

審査員は、前回から審査委員長を務める木村俊光（バリトン）をはじめ、チェ・サンホ（韓国、テノール）、デヴィッド・ガウランド（ロイヤル・オペラ芸術監督）、浜田理恵（ソプラノ）、ウェルナー・ヒンク（元ウィーン・フィル・コンサートマスター）、伊原直子（アルト、東京藝術大学名誉教授）、三浦安浩（演出家）、フランソワーズ・ボレ（仏、ソプラノ）、レノーレ・ローゼンバーク（スポレート・フェスティバル音楽監督）、ガブリエッラ・トゥッチ（伊、ソプラノ）、ユ・シセイ（中国、テノール）。

本選出場者は（演奏順に）、城宏憲（テノール、1984年生れ、日本）、チョー・チャニCHO ChanHee（バス、92、韓国）、ムン・セフンMOON Sehoon（テノール、84、韓国）、小堀勇介（テノール、86、日本）、リ・アオLI Ao（バスバリトン、88、中国）、コ・ピョンジュンKO ByugJun（バリトン、89、韓国）。

入賞は、第1位：ムン・セフン、第2位：リ・アオ、第3位：コ・ピョンジュン。三浦環特別賞（日本国籍で、将来の活躍が期待される方へ）は城宏憲、オーディエンス賞はコ・ピョンジュンがそれぞれ受賞した。本選では、審査員による選定曲と自由曲との2曲を歌う。

ムン・セフンへの選定曲はドニゼッティ《ドン・パスクワレ》エルネストの「遙かなる土地を求めて」。この人にはパッサジョ域などないと思わせる程、支えも技術も完璧な柔らかなハイトーンで歌い通し、アクトの精度の確かさを聞かせた。自由曲に選んだのはヴェルディ《リゴレット》のマントヴァ公「彼女の涙が見えるようだ」。不埒者マントヴァが劇中唯一のぞかせる殊勝な心持ちののぞく誠実味を帯びた美声を響かせ、3拍子に変わった箇所などは会場が静まりかえった。ハイテノールの役も、ドラマチックな役も感銘深くこなせる実力を示した第1位であった。

リ・アオは、モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》レポレッコの「カタログの歌」（選定曲）とラフマニノフ《アレコ》の「みんな寝ている」で、ブッフォと真ん中の曲と悲劇性の濃い役との両極を見事に演じ分けた。リ・アオは一声で心を掴む美声の持ち主で、レポレッコの早口で繰り出す歌詞の隅々にまでその美声が行き渡り、また演技も卓抜。翻ってアレコでは声自体が悲劇性に溢れ、演技・歌詞・物語が声の中で渾然となって響き

渡る。最後のクレシェンドも見事だった。

コ・ピョンジュンも、稀にみる美声のバリトン。選定曲はロシアニ《セヴィリアの理髪師》のフィガロ「私は街の何でも屋」で、声の魅力とコミカルな雰囲気为一体となった完璧なフィガロだった。自由曲はジョルダノ《アンドレア・シェニエ》ジェラル「国を裏切る者」。幼小からの思いと邪心とがないまぜとなった複雑な恋心だけでなく、革命の現実への相克も内包し、深刻かつ多面的な問題の潜む役のエッセンスとも言えるアリアを、切迫感のある声と演技で好演した。

城宏憲は、自由曲ベッリーニ《ノルマ》ポッリオネ「彼女とともに、ヴィーナスの祭壇へ」では、最後のハイB♭も美声で響かせた。そのポッリオネとは打って変わって、ビゼー《カルメン》「花の歌」では、ドン・ホセの切なさや熱い気持ちがひしひしと伝わる魅力的な歌唱であった。

チョー・チャニは、ヴェルディ《ドン・カルロ》フィリッポ2世「彼女は私を愛したことがない」と、選定曲グノー《ファウスト》メフィストフェレス「黄金の子牛の歌」と、かなり両極端のキャラクターを演じ分けた。チョーはかなり高音まで美声の轟くバスで、広い音域の求められるメフィストではまさにその音域の広さ・美しさを証明し、バスの逸材として強烈な印象を残した。

小堀勇介は、ドニゼッティ《連隊の娘》トニオ「マリーに会いたがために」と、難曲ロシアニ《セミラーミダ》からイドレーノ「ああ、どこに危険が」（自由曲）。甘いトニオの音色に対して一転、イドレーノでは芯のある輝きのある音色を使い分け、難所だらけのイドレーノのアリアでは、声を巧みにコントロールしながらパッセージをこなした。

コンクール後の記者会見で「世界のレヴェルを知ることができる。あと1〜2年でファイナリストたちのレヴェルに達しないと、劇場の門が閉ざされる」と城宏憲がファイナルでの実感語っていたが、同コンクールがいかに世界のステージを映し出しているかの証左であろう。この3月にも東京二期会の舞台を踏む城をはじめ、今年も第一線で役を得ている若手が凌ぎを削ったファイナルであった。